

(続紙 1)

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	張 尋
論文題目	清末中国のキリスト教系学校における英語教育史研究：入華宣教師による言語観と教育理念をめぐって		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、清末中国（19世紀後半から1910年代まで）のキリスト教系学校での英語教育、ならびに英語による教育活動の実施について、宣教師が抱いた言語観と教育理念の解明をめざす。本論文は、序章と終章とあわせて、全8章から構成される。</p> <p>序章では宣教師による英語教育を論じる意義を、研究背景と先行研究を整理しながら明らかにする。清末中国のキリスト教系学校において教育を担当した宣教師が抱く言語観や教育理念の解明は、19世紀後半から20世紀前半にかけて人材育成の一翼を担ってきたキリスト教系学校に関わる英語教育史研究にとって重要な課題である。本研究は、学校の事例を研究するにあたり、宣教師と宣教教育団体が抱く言語観と教育理念の特徴に注目し、以下の構成に従って考察を進めた。</p> <p>第一章では宣教雑誌と宣教師会議に発表された宣教師の言説を対象として、英語教育の是非をめぐる入華宣教師の英語観を分析した。宣教師によれば、英語は外国人との商業活動に直接に結びつくと同時に、西洋近代の知識や思想と接触するための媒体でもあり、また英語は思考様式や思考能力に密接に関連するとともに、ラテン語やギリシャ語のような文明語、宗教語として位置づけられていた。宣教師はこのような言語観のもとに、中国人学生が金銭的誘惑を被り宗教的影響を離脱する可能性のあるなかで、精神的変革を唱導し、英語教育を展開していた。</p> <p>第二章では宣教と教育現場における英語教育の位置づけと役割に関する宣教師の視点を分析した。英語は宣教の補助手段として特定の社会階層への接近に役立つとともに、教会の経済面にも影響を及ぼした。また、キリスト教系学校の卒業生に聖職者の志望者が少ないのは、英語が彼らを現地民衆から疎遠にってしまったためであろう。さらに教育現場における英語の位置付けに関して、媒介言語としての英語に関する意見は一致を見なかった。中国ではこのような課題を論じるにあたり、日本の英語教育の状況が参照され、その情報は中国の教育の将来構想に活用され、入華宣教師たちの認識の一部に統合された。</p> <p>第三章では、プロテスタント宣教師が結成した中華教育会（EAC）の英語教育に関する理念と活動を検討した。EACは公的な強制力を持っていなかったが、全国の宣教師のため</p>			

に教育問題に関する情報提供と意見交換の場を設け、英語教育に関する判断基準と行動指針を提供した。そして清末中国の英語教科書と教授法の発展を積極的に宣伝した。その結果、EACが提案した試験計画と教育課程は、教派の宣教方針と地域の違いを越えて、中国で統一的な英語教育を展開する可能性を提示した。

第四章はプロテスタント宣教師による英語教育に注目する。1895年と1905年には外国人が関係する教育機関に対する調査が実施されたが、その結果を概観し、英語教授法をめぐる宣教師の認識や、東呉大学と杭州育英書院における英語教育の変遷や担当宣教師の教育理念を分析した。英語教授法に関しては、キリスト教教育のなかでも宗教的要因を顕在化しないこと、英語教育の目標をいくつかの構成要素や習得段階に分割し、外国語の効果的な教授に焦点を当てることなどが議論された。

第五章では山東の登州文会館の事例を通して、英語教育を実施しない方針を訴える宣教師C. W. マティーアの言語観とその教育理念を明らかにした。マティーアは中国の民衆に受け入れられる知識人を育成する教育を目指し、英語の世俗性はキリスト教系学校の宗教性と両立しないと判断した。そのために中国の古典を重視したが、これは登州文会館の教育課程を特徴づけた。登州文会館の事例は、英語教育に関する宣教師の言語観や教育理念の異なる側面を提示している。

第六章はカトリック教会に属する教育機関での外国語教育に注目する。カトリック教会に関連した中国人知識人馬相伯とカトリック宣教団体は外国語教育をめぐる教育理念に関わり対立した。それは、英語クラスの撤廃がもたらす震旦学院の解散と、のちに設立された復旦公学とオーロラ大学が入学者に対して外国語能力を要求している事情に現れている。震旦学院は翻訳人材の育成を目指し、西洋諸語、とりわけラテン語を重視していた。一方、オーロラ大学はイエズス会によって運営され、中国におけるフランスの大学として教育活動を進めていた。フランス語は震旦学院において宗教団体の象徴とみなされたが、オーロラ大学ではフランスの文明化の使命を普及する象徴となった。

終章では本研究の結論を述べ、今後の課題を展望した。入華宣教師は地政学的・歴史的に制約された文脈のなかで言語観を構築し、キリスト教系学校の学生を聖職者や教役者へと育成する教育を行なった。中国社会が英語を要望する一方で、宣教師の教育観は宣教組織としての学校と世俗的組織としての学校の間で揺れ動き、翻訳法とインド製教科書の利活用により英語教育の発展を目指していた。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、19世紀後半から20世紀初頭までの清末中国のキリスト教系学校における英語教育、ならびに英語を教育言語とする教育活動に関与した英語圏出身のキリスト教宣教師が抱いた言語観および教育観を解明している。本研究は中国における外国語教育史研究に位置づけられるものの、言語教育学、言語政策、キリスト教宣教師史、中国近現代史など複数の研究領域にも密接に関連しており、学際的研究としての価値を持ち、また英語、中国語、日本語の文献史料を博搜し、多角的な角度から考察を進めていることから高く評価できる。

中国で英語教育に携わった宣教師たちは、中国社会との関わりのなかで、英語という言語について、および西洋に起源を持つ科学の知識などを伝えるための媒介言語としての英語についてどのような言語観を抱き、どのような目的のもとで、またどのような教授法を考案したのかを、本研究は様々な宣教師の言説を丹念に分析し解明している。これらの言説の分析により、当時の西洋の宣教師やその教育を受けた中国人たちが、英語および現地語をどのように表象したのかという点をも考察し、彼らの言語観も分析し、解明したことは特筆すべき点であり、外国語教育史研究における新たな研究領域を開いている。実際、これまでこの分野での研究は少なく、中国の外国語教育史研究においても英語をめぐる教育についての分析には十分な地位が与えられてこなかった。

英語は西洋文明を中国に導入するにあたって有用な道具であり、近代化を願う中国人にとって必要不可欠である。しかしこのような英語の位置づけは、英語が中国人にとって社会的有用性に直結していることをも意味するもので、高度な英語能力を持つ中国人は宣教師のもとで英語による教育を受けたとしても、キリスト教宣教の奉仕者となるよりは、英語の利便性を経済活動に転換することから、キリスト教宣教に結びつかない。英語教育や英語による教育は宣教活動のなかでジレンマをも生み出す。学校は英語教育や英語を媒介とする教育の場であるなかで、宣教を目的とするのか、それとも世俗的目的に仕えるのか、宣教師たちの視座や活動はこのふたつの方向性の間で揺れ動いていた。

また宣教師の関心は最終的には中国の一般民衆に対するキリスト教宣教であったことから、彼らの養成した中国人が知識人として民衆に尊敬されるために中国の古典の教育も行う必要があると判断した者もいる。さらに、宣教師のなかには中国語にもまして英語こそが宗教言語として中国社会において承認されることを確信するものもあり、現地語や現地文化への尊重に欠ける傾向もあった。

近代中国の高等教育における英語の位置づけをめぐる一連の議論は歴史的考察にとどまることなく、英語教育の過熱化する21世紀の日本社会にも部分的に通底する。現代世界では国際語としての英語の価値が広く承認され、英語教育の推進が盲目的なまでに訴えられるとともに、英語を媒介言語とする動向も著しい。このような社会の動向は19世紀末の中国の事情にも比較できる。

公聴会では先行研究との関連、宣教師個人の言説が断片的で、歴史的文脈において妥当性を持つのか、さらには本研究の意義をより明示的に提示する必要があるのではないかといった疑義も提出されたが、それらについては今後の研究を通じてさらに解明されると思慮されることから、本研究の価値を損なうものではない。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和5年8月8日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 令和 年 月 日以降